

編集後記

新年が明けたかと思えばあっという間に今年も一ヶ月が過ぎました。寒い毎日が続いています。

今月は、越境することと異文化体験について思考を巡らさずにはいられない二本をお届けします。

広田康生先生による論文は、明治から昭和初期にかけての日本人の越境体験がいかなるものであったのか、日本人や日系人の集住とコミュニティ形成の場となった「磁場」がどのような役割を果たしたのかについて、山口県周防大島沖家室と越境先の布哇ホノルルを対象に文献記録や親族へのインタビューなどをもとに丹念に整理・考察されたものです。その双方の「都市的世界」としての側面について、越境者たちの「場所へのアイデンティティ」にシンクロしながら考えさせられました。

一方、伊吹裕美さんによるレポートは、ご本人の越境体験として一年間におよぶトルコでの留学生活中の見聞——選挙や、スカーフと女性問題のような政治社会的問題から宗教、音楽、食卓といった日常生活までトルコのあらゆる風景——があますことなく描かれています。晴れ渡った丘に立ち、輝くボスポラス海峡を見下ろし、滞在許可書を取りに行き、色あざやかな市場を歩き、コンサートでトルコ伝統音楽を聴き、街でラクを飲みながらアラバスクを聴く、それを追体験しているような気分になります。(HH)

執筆者紹介 (アイウエオ順)

伊吹 裕美 人文科学研究所特別研究員
広田 康生 人間科学部教授

専修大学人文科学研究所月報

第 255 号 (2012. 1. 30)

〒214-8580 神奈川県川崎市多摩区東三田 2-1-1

専修大学人文科学研究所

発行者 小山利彦